突然、強い風が吹き付け、二人の間を揺らした。
二人は身動きもせず、その場に立ち尽くしていたが、やがて雨が降り出すと、その場を離れ、一緒に階段を下りた。
すでに食堂は人もまばらで、カウンターの料理もほとんど片付いている。リズは彼のために取り置きしていたプレートを厨房に頼んで温めさせると、ワイングラスを添えて食堂に持ってきた。彼もいつもと違うメニューをまじまじと見つめ、「今夜はずいぶん豪勢だね」と嘆息する。
「サフィールの調理部に協力してもらったの。明後日のパーティーはもっと豪華よ」
「パーティー？」
「そうよ。夜に娯楽室で二時間ほど祝賀会を開く予定なの。シャンパンも出るし、ビンゴゲームも用意してるわ。皆さんに楽しんで頂ければと思って」
「至れり尽くせりだね」
「当然よ。ここに骨を埋める覚悟で長年勤めて下さったのだもの。簡単に十年、二十年と言うけれど、誰にでも出来ることじゃないわ。感謝だけでは足りないくらい」
「でも、その間、君のパパだって従業員を路頭に迷わせなかったんだから、大したものだ」
「そんなことはないわ。ダグにもガーフにも辞める自由はあるんですもの。ずっと付いてきて下さったのは本当に有り難いことよ」
「君は大した跡取りになるよ」
「跡取りなんて器じゃないわ。私なんか、たまたまアル・マクダエルの娘に生まれただけ。自力で得たものなど何一つないもの」
「だが、心は君自身のものだろう。教えて身につくものじゃない」
プレートのものを平らげ、ナプキンで口を拭うと、「君は明日、どこでミッションを見学するんだ？」と訊ねた。
「五階の管制室よ。ダグやガーフと一緒にモニターで見学するの」
「どうせならタワーデリックのオペレーションルームの方が迫力があるんだけどね。目の前で揚鉱管を連結して、海中降下する。でも、あそこはさすがに君には無理だ。明日はマードックも非常な集中力を要する」
「よかったら、ムーンプールを見せて下さらない？

この前は機械が稼動して、遠目にしか見られなかったから。今なら機械も止まってるし、数分だけでも間近で見たいの」
「どうして」
「私、どうしても信じられないのよ。水深三〇〇〇メートルという海の深さが。だって、三〇〇〇メートルって、二百階建ての『トリヴィア・トレードセンター』を二つ並べたより、まだ深いのよ。そんなのがすっぽり隠れるほど深いって、どういうことなの」
「理屈じゃないさ。それだけ厚い水の層が惑星の表面を覆ってるということだ。天道虫から見れば、深さ一メートルのプールも深海だ。人間のスケールでは計り知れないだけで、宇宙から見れば薄皮みたいなものだよ」
　彼はちらとダイバーズウォッチを見やると、
「今のうちに見に行こう。一時間もすれば下層階の照明が落ちる。薄暗がりでは、俺もさすがに案内が難しい」
　二人はブリッジを出ると、選鉱プラントの階段からレベル・マイナス1に降りた。
　どこも薄暗く、船の機関室のように轟々とエンジン音が鳴り響いている。まるで監獄みたいな通路を足早に突っ切り、スチール製のドアを開くと、ムーンプールに行き当たった。一辺一〇メートルの開口部は黄色い二重の手摺りに囲まれ、激しい水音が巨大洗濯機みたいに辺りに鳴り響いている。
　ヴァルターはクレーンの操作ブースに備えられている白いヘルメットをリズの頭にかぶせると、上半身に八の字の襷（たすき）のような安全ベルトを装着した。それから背中の留め具に幅広のゴムバンドを取り付け、もう一方の先端を支柱のフックに固定する。リズは高層ビルの作業員みたいにベルトとバンドでぐるぐる巻きになると、「なんだかプードルみたいね」と恥ずかしがったが、ここでは安全装置は必須だ。プールに落ちれば、海面に叩きつけられたショックで気絶し、あっという間に波に呑み込まれて絶命する。彼も手早く安全ベルトとヘルメットを装着すると、リズの背中を抱いて手摺りまで誘導した。
　手摺りをしっかり掴み、恐る恐る足下を覗くと、はるか下方に暗い水面が見える。まるで海底から波動が

突き上げるように水が右に左に打ち付け、高さ数十メートルの断崖絶壁を覗いているみたいだ。
「すごいわ。海のエネルギーをぎゅっと凝縮したみたい。この水面が水深三〇〇〇メートルの海底まで続いているのね」
「そうだ。砂浜から見れば静かに横たわっているように見えるが、内側には計り知れないエネルギーを秘めている。何千年とかけて惑星の隅々に物質を運び、岩を削り、熱を伝え、そのメカニズムを知れば、波の一つ一つが惑星の呼吸に聞こえる」
「そのエネルギーが海台クラストを作ったのね」
「クラストに限らず、海底の鉱物は、潮流、噴火、風雨、微生物、あらゆる自然現象の結晶だ。海はそれを何百万年、何千万年と懐に抱いて醸成させる。今こうしている間にも新たな鉱物が作られ、星の形状を変えて行く。海はまさに生きているんだよ」
「そんな海の深い所から、どうやって鉱物を引き上げるの？」
「最初に破砕機でクラストだけを剥がし、次に集鉱機で掃除機みたいに掻き集める。集鉱機に繋がった揚鉱管には流水が循環していて、高圧水中ポンプで内側を負圧にすれば、圧力差で吸い上げることができるんだよ。ストローみたいにね」
「でも、全長三〇〇〇メートルでしょう。途中で折れ曲がったりしないの？」
「揚鉱管の揺れに合わせてプラットフォームも移動するから、よほどの事がない限り、ぽきんと折れることはない。ライザーテンショナーという装置で揚鉱管の振動を吸収したり、管の歪みを検知するセンサーを取り付けたり、様々な対策を施しているから大丈夫だよ。いざとなれば、集鉱機から揚鉱管を切り離し、致命的なダメージからシステム全体を守ることもできる」
「だけど真っ暗で、投光器で照らしても何も見えないのでしょう」
「そうだね。よく見えても半径十メートルだ。カメラの視界はもっと限られる。陸上なら簡単に接続できる作業も、深海では暗闇との戦いだよ。電気も電波も届かないからね」
「それでも、やるのね」
「そうだ。皆それを目指して何十年と打ち込んできた」
「そして、あなたも」

だが彼は答えない。心はまだ清明とせず、波の狭間を漂っている。
リズは彼に向き直ると、「私の運をあげるわ。右手を出して」と促した。
「運を？」
「私、生まれつき強運なのよ。巡り合わせがいい、とでもいうのかしら。こうなって欲しいと願えば、その通りになるの。まるで心の絵が投影されるみたいに。パパは私のことを『フォルトゥナの娘』と呼んでるわ。自分でも時々、そんな風に感じることがある。だから、右手を出して。明日のミッションも運命の加護が得られるように」
「運命なんて、俺は信じないよ」
「あなたが信じようと、信じまいと、運命はいつでもあなたと共にある。あなたが少しでも心を開いてくれれば、運命はあなたに手を差し伸べることが出来るのよ。船の帆を孕ませる追い風のように」
「君がそう言うなら、明日は信じるよ。ただし追い風ではなく、深海の作業には光と静けさが何よりも大事だ」
「光と静けさね。分かったわ」

彼が半信半疑で右手を差し出すと、リズは彼の手を両手で優しく包み、「Fortes fortuna adjuvat（フォルテス フォルトゥナ アドユウァト 運命は強い者を助ける）」と唱えた。ぎこちなく構える彼の手に、彼女の指先から新たな力が注がれる。さっきまで悲しみの海を彷徨っていたのが嘘のように目の前も清明とし、心に一筋の光が差すようだった。
やがて雨脚が強くなり、風の音がこだまする。二人は急ぎ足でブリッジに戻った。
「明日は雨かな」
「今夜だけよ。太陽が昇る頃には雨雲も過ぎ去るわ。明日は何ものにも邪魔させない」
リズは夜空を見上げ、再び祈りの言葉を唱えた。彼女は本当に運命の女神なのか、ヴァルターも不思議な気持ちで彼女を見つめた。
「それじゃあ、私はパパの所に戻るわ。あなたも今夜はゆっくり休んで」
「ありがとう。少し気分転換になったよ」
そうしてリズがその場を立ち去ろうとすると、
「採ってきてやるよ」
彼が後ろから声をかけた。

「海台クラストだ。水深三〇〇〇メートルの海底から、君の為に採ってきてやる」
リズは微笑んで返すと、軽やかに階段を駆け上がっていった。